

大学の初級学習者に対する英語発音指導法の構築と実践 調音音声学に基づく音声入門書とリーディングテキストを用いて

An effective English pronunciation teaching for university students on a basic level: A case study of a teaching program with an introduction in articulatory phonetics and reading materials for learners

桑本 裕二

KUWAMOTO Yuji

和文要旨：本稿は大学における英語発音養成の2つの取り組みに関する実践に基づくものである。一つは英語音声に関する初歩的な入門書を用いた発音知識の教授であり、もう一方は受講者に合わせたレベルの50～100語程度の英文を反復練習させたものである。このような授業実践は、特に初歩段階の受講学生にとって発音の知識を身につけ、実際に流暢な英語発音が可能になるに十分効果的であることを示した。また、知識の教授と音読の反復練習の実践は、効果的な発音養成には両方とも必要であることも示唆した。

【キーワード】 英語教育、発音教育、調音音声学に基づく教授法、音読練習を用いた教授法、日本人学習者の英語発音

Abstract : This paper is based on a case study of two approaches to teaching English pronunciation at a university level. One is teaching basic articulatory phonetics with a very simple introduction to English sounds. The other is training with repeated reading of short passages with 50 to 100 words excerpted from reading materials at an appropriate level. I show that this teaching program is quite effective in helping learners, especially beginners, to master segmental and prosodic knowledge and actually to pronounce English quite fluently. I also suggest that both teaching phonetic knowledge and repeated reading practice are needed for effective mastery of English pronunciation.

【Keywords】 English teaching, pronunciation teaching, teaching program based on articulatory phonetics, teaching program with reading materials, English pronunciation of Japanese learners

1. はじめに

これまで、小学校から高等学校までの英語教育において、発音に関する指導、養成は最も疎かにされてきたものといってよい。音声をともなった英語のコミュニケーション能力を豊かにするためには、英語ネイティブのALT (Assistant Language Teacher) が母語の英語を使用して授業を行うのに任せておけばよい、またそうす

ることが最善の方法であるといった神話が横行し、学習者である児童、生徒は、英語の聞き取りはある程度できるが、正確な発音やアクセントなどを伴った上での流暢な発話は、教育によってはほとんど達成されていないといえる。鳥飼 (2018:89f.) はこの点について、「ネイティブスピーカーも英語を母語としているというだけであり必ずしも教育者であるとは限らない」とした上で、その不十分さを指摘している (他に大津 2007、高橋他 2009 など)。また、その背景には日本人の英語教員が持つ、正しい英語発音が実践できていないことの劣等意識のよ

* 公立鳥取環境大学教授

うなものもある（鳥飼 2016:24f、桑本 2012）。

近年、大学においても、「英語で授業を行う」ということを全面に出し始めている。このような方針は、ある一大学において部分的に（つまり全体の必修単位数の一部とか、2学年の履修義務期間のうちの半年または1年という限定で）施行するのであれば、英語で行う授業によって、英語の音声に慣れ親しんでリスニング力やスピーキング力がある程度伸ばし、それ以外の英語授業によって、文法の理解をともなった読解や英文作成を行ってそれらの技能を養成できるので、英語の「読む」「書く」「聞く」「話す」の4技能をバランスよく養成することは可能であろう。また、もともと基礎力の備わった学力層の入学者が見込まれる一部の大学での英語による授業の実施であれば、受講学生の一定水準以上の英語力を活性化させて、最終的には、論理的内容を伴った議論を行ったり、授業のレポートや卒業論文などを英語で書くということにも結びつく。しかし現在の大部分の大学で、「英語だけを用いた授業」を、しかも全ての授業を英語で行うというのは、前述の高等学校までの英語教育を経てきた学生にとっては、発話能力の向上という点に限定したとしても、あまりにも非効率であると言わざるをえない。なぜかというところ、そのような学習者は日英語の発音の違いや、英語の中にある様々な音の区別について教わった経験がなく、発話に関して適切な指導も受けていないので、大抵の場合は「正しい英語発音」が実現できないまま放置されてしまっているからである。しかも、文法の理解や読解力（または聴解力）も伴っていないため、そのような状態で英語のみを使った英語授業を受けても、十分な効果が望めるとは到底思えない。

以上述べてきた英語教育の現状をふまえた上で、筆者は英語発音指導を英語教育の極めて重要な項目であると考える。そのためには、現在の、特に大学における英語教

せを主に練習する。たとえば、語末の /m/ , /n/ の存在やそれら相互間の区別を them then などの対立を練習することで、/wɒ/, /jɪ/ などの連続を、woman, year などの短い単語を用いて練習の素材として示している。

これらの音読練習に先だて、調音器官の図示によって、例えば、/p/ は、「パ行」の子音である、と同時に、両唇閉鎖音であることも認識させる。そのことによって、日本語の類推の効かない [1c] に分類される子音の理解や音読練習による発音実現を容易に導くことができる。

母音に関しては、日本語の 5 母音に対して英語は単母音だけでも 10 母音あり (川越 2007) 日本語からの類推は全くできないとした上で、カタカナ語においてそのような音だとみなしている現状について母音四角形上に表示する。図 1 . は、英語 10 母音のうち、英語由来の外来語等で「ア、イ、ウ、エ、オ」とみなしている音声を囲んで整理したことを示す (桑本 2017:97、一部改変)。

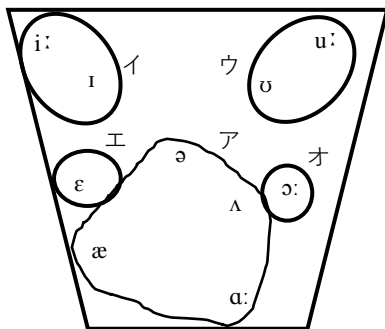


図 1 . 英語の 10 母音 (単母音) と日本語の母音の「みなし」

例えば、father /fɑːðə/, mother /mʌðə/, map /mæp/, bird /bɜːd/ の下線部は、すべて異なる母音であるのに、日本語の外来語もしくはカタカナによる音訳などでは、それぞれ、「ファーザー」「マザー」「マップ」「バード」とすべて同じア段の音になっており、このような日本語での母音の「みなし」に気づき、発音の際に注意すべきであることを強調する (桑本 2017:98) 。その後の部分では、日本語として同じ母音とみなしている音の最小対立、例えば cap /kæp/ と cup /kʌp/ などの対比による音読練習の素材を提供する (例えば桑本 2017:104) 。

音節とアクセントに関しては、ハンバーガーのチェーン店 McDonalds (マクドナルド) について、日本語と英語がいかに違っているのかについて、日英語の音節構造とアクセント体系の相違に言及して説明する。音節に関しては、「マクドナルド」が 6 音節、McDonalds が 3 音節と 2 倍違い、日英語相互の理解を困難にさせている原因のひとつとして挙げ、それは英語には子音連続や

閉音節が頻繁に現れるからであり、これらのほとんど現れない日本語との違いに気付かせる。アクセントは、日本語のピッチアクセントに対し英語がストレスアクセントであることを示して両者の差異に言及している (桑本 2017:128 .) 。

リズムに関しても日英対照を用いている。具体的には、日本語がモーラ 2 つを一つの脚 (foot) とし、それらが 4 回繰り返されるのがまとまった単位となっていて、五七調や七五調の基準となっていてリズムが形成されてそれが「心地よい」と感じられるのに対し (別宮 1977) 英語は強弱もしくは弱強のアクセントの繰り返しが基調となっていて、リズムの体系が全く違うことを認識することを目指している (桑本 2017:146 .) 。

4 2 リーディングテキスト

音読練習で使用したのは

Coleen Dignan-Veness with Chantal Veness, MacMillan Publishers Limited, 2013 (以下、シリーズ名は MacMillan Readers、書名は) である。MacMillan Readers は、英語の難易のレベルごとに学習者が適したものを選ぶことのできる読み物のシリーズである。MacMillan Readers のウェブページに示されているレベルの基準は表 2 . のとおりである。

表 2 . MacMillan Readers のレベルの基準 (ウェブサイト「MacMillan Readers Catalogue 2018-2019」)

レベル	語数	CEFR	TOEIC	英検
1 . Starter	300	A1	300	4
2 . Beginner	600	A1	400	3
3 . Elementary	1,100	A2	450	準 2
4 . Pre-intermediate	1,400	A2-B1	500	2
5 . Intermediate	1,600	B1-B2	550	準 1
6 . Upper-intermediate	2,200	B2	600	準 1 +

本授業実践で使用した については、表 2 . におけるレベル 4 . Pre-Intermediate に属する。このレベルは、CEFR A2-B1、TOEIC 500スコア、英検 2 級程度とされる。大学入学時の学習者にとっては、難解な語彙や表現もなく、内容は容易に理解できるという程度である。本稿の授業実践の受講者 (平均で TOEIC400程度) にはやや難解であるが、少し高い程度

の英文で練習する方が学習の効果は高まるものと思われた。このような理由で、「レベル4」の難易度は、音読を繰り返し行うには最適のレベルであると判断した。

また、本テキストは、アメリカ合衆国の地勢や文化、社会、政治、歴史などを説

law low

日英語のアクセント体系の違いと英語のアクセントに対する認識の養成

英語初学者にとって、英語のストレスアクセントを体感し、発音に実践するのは非常に困難である。英語のストレスアクセントを理解する前提として、日本人学習者であれば、日本語のピッチアクセントについて理解し、日英語のアクセントの種類の違いを正しく知ることが、英語アクセントの効果的な習得につながるものと思われる。筆者が実際に示したものは、[6] のようなもので、桑本(2017:137f.)を抜粋したものである。日本語のピッチアクセントは高音調と低音調の組み合わせ(アクセント位置は高音調が下降する位置なので、「ナ」にあるとする) 英語のストレスアクセントは、強勢のある音節 dɔː をやや大きめの黒丸で、他の音節 mək, nəldz をそれより小さな黒丸で表示して示した。

[6] 日本語のピッチアクセント: マクドナルド
英語のストレスアクセント: mək dɔː nəldz



それでもなお英語のストレスがわかりにくいという印象があった。Fry (1955) によると、英語の強勢は、強いと同時に、高くてなおかつ長いということである。Fry (1955) の主張をふまえ、[6] の強勢音節 dɔː を表す はやや横長にして、「長い」という点を強調して示し、同時に音読に際しては、強勢アクセントはやや長めに発音することを指導した。

Yamane (2016) は、学習者が強勢アクセントを実際には「高く」発音していることも示している。しかしながら筆者は、この点を強調すると、いわゆる「カタカナ読み」を誘発する恐れがあるので、この点には言及しないことにし、次のような例を挙げて、その不都合さについて説明した。つまり、たとえば international という単語は [7a] のようなアクセントが置かれ、[6] にならってストレスアクセントを黒い で示すならば、[7b] のようになる。(第一) 強勢がおかれた [nə] の位置が「高い」とみなすならば、高低の配列はおよそ [7c] のようになるが、この高低アクセントをあまりにも忠実に適応してしまうと、まるで [7d] のような、カタカナ「インターナショナル」を読んでいて「ナ」だけが低いという読み方になってしまう。

[7] international のアクセント付与

a. ɪn tə nə ʃə nəl

b. ●●●●●● ●● ストレスアクセントに基づく

c. _____ ピッチアクセントに基づく

d. インターナショナル

5 2 反復練習と指導の実践

を用いた音読練習は、2018年度後期開講分のリメディアル英語15回で行った。期間は2018年10月から2019年1月までの約4ヶ月に及んだ。音読に用いた資料は、 の中から抜粋した以下の2つの資料である ([8], [9])。

[8] 資料1 : The age when people can learn to drive is different from state to state. In South Dakota, teenagers can start driving when they are only fourteen years old; in New Jersey, teenagers have to wait until they are seventeen. But for the first time since the 1950s, fewer teenagers now want to have cars, because gasoline is becoming more and more expensive. (62 words)

. p.18.

[9] 資料2 : The United States of America (the USA) is a very big country: the rivers and mountains are big, and the population is big. There are big cities, a lot of big houses and big cars. People have big dreams, too. Everyone wants to live “the American Dream” the idea that anyone who works hard can become successful and rich. It is a dream that really happens more often in movies and books. Many immigrants have gone to the USA hoping they will become one of the lucky ones. (94 words)

. p. 6.

それぞれの資料は、ここに示したとおり平易なもので、資料1は、from state to state more and more expensive などの、同一語が繰り返される箇所があり、リズムの練習に最適である。資料2は、資料1よりやや長めで、その分、同格の that 節や関係節のあるやや複雑な構文を含み、そのような箇所の音読に際しては、ポーズの置き方などが問題となるため、[8] から [9] の順序で反復練習をすることは段階的に文章音読を習得するためには効果的であると考えた。

4 1節 [1] に示した英語の24子音 (/p/, /b/, /k/, /g/,

/tʃ/, /dʒ/, /m/, /n/, /j/, /w/, /s/, /z/, /t/, /d/, /h/, /f/,
/v/, /θ/, /ð/, /ʃ/, /ʒ/, /l/, /ɹ/, /ŋ/) 図1 . に示した単母
音10種 (/i:/, /ɪ/, /ε/, /æ/, /ə(or /ɚ:/) /ɑ:(or /ɑ/) /ʌ/,
/ɔ:(or /ɒ/) /u:/, /ʊ/) および、二重母音 8 種⁵⁾ (/eɪ/,
/aɪ/, /ɔɪ/, /aʊ/, /oʊ/, /ɪə/, /εə/, /ʊə/) 三重母音 2 種⁶⁾
(/aʊə/, /aɪə/) のうち、獨り音、二重母音、三重母音

分節音の発音に問題が集中していることが示される。このように、学習者のもつ発音上の改善点は多様であったので、学習者ごとに個別に異なる指摘を行い、それぞれの受講者ごとに改善点を明確にできるようにした。

音読の向上の推移を確認するため、12月下旬と1月下旬に資料1、資料2の両方の音読を録音した。また、1月下旬の録音時に、学習者にとって初見の資料の音読も行い、それを録音し、練習によって記憶したり指導を受けていない資料を正確に読めるか、確認した⁸⁾。

6. 実践のデータと考察

6.1 はじめに

当実践において、6人の受講者に対して音声録音を行い、データを分析すると、実施期間の約4ヶ月の間に、様々な点において向上がみられた。その反面、発音養成の困難な点も明らかになった。本節では、6.2 分節音と音節の習得について、6.3 英語アクセントの獲得について、に分け考察する。

6.2 分節音と音節の習得について

英語に特有の分節音と、子音連続や閉音節など音節構造の習得状況を確認するために、研究参加者の英文音読の2度の録音を基に、両者でどれだけの改善が見られたのかを確認した。資料1の英文について、受講者については、受講開始の10月初旬頃と、受講終了の1月下旬頃、未受講者については、受講者がリメディアル英語の受講を終わる時期に、ネイティブ発音を聞かせる前後の2回の音声データを基に、正しく発音できたかを点数化して比較した。判定の対象となる分節音、子音連続、閉音節は、資料1に出てくるものから選択した。

分節音については、子音と母音に分け、子音は /f/ (2個) /v/, /θ/, /ð/, /ɹ/, /l/, /sɪ/ (2個) /zɪ/ の8種10個、母音は /æ/, /ɔ:/, /ə:/, /oʊ/, /eɪ/ の5種それぞれ2個ずつ10個について、発音ができていれば1点、できていなければ0点で、子音、母音をそれぞれ10点満点で評価し、発音練習の始めと終わり(未受講者はネイティブ発音を聞いた前後)で点数がどれだけ変わるのかを確認した。図4 .

は、受講者、未受講者の平均点で、と線が引かれ、縦軸は0から10まで、横軸は受講開始と受講終了の2点、それぞれが個返航、ち罰、菝苳惚、谷驚憶、兩違、一奔、箸、7、函、涌、琶、牙、近、剪

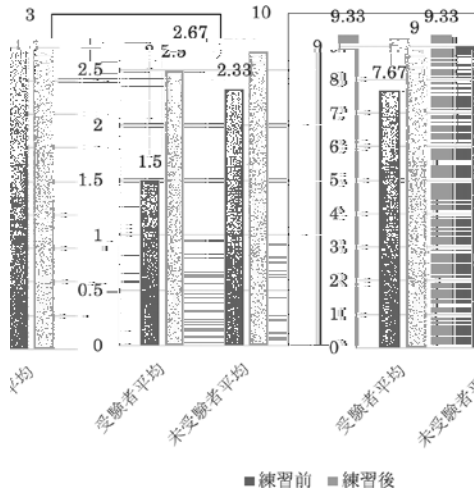


図5．子音連続の得点の推移

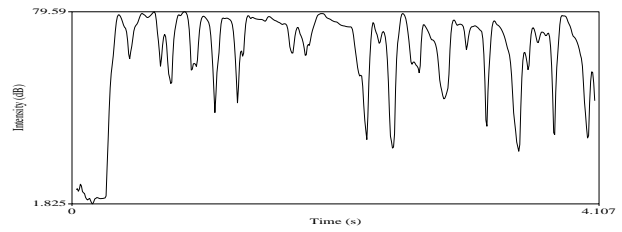


図7a．サンプルの英語ネイティブスピーカーの強さ曲線

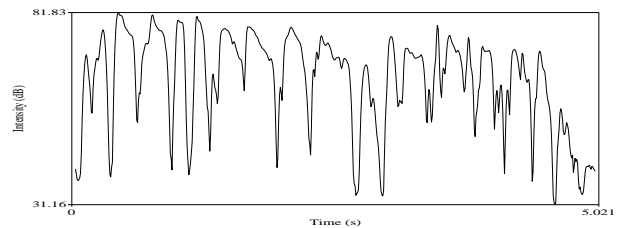


図7b．音声指導開始直前の受講者Fの強さ曲線

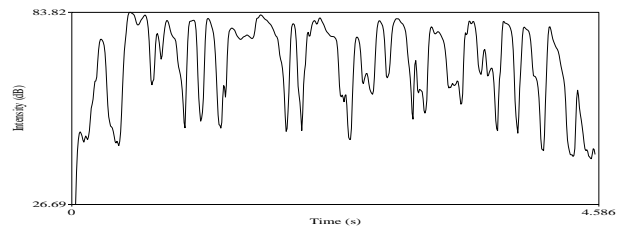


図7c．音声指導開始4ヶ月後の受講者Fの強さ曲線

得は9割を越え、ほぼ習得されたとみなしてよい。

6.3 英語アクセントの獲得について

アクセントの養成に関しては、指導開始当初の受講者の英文音読の実態を観察したところ、最も指導の必要な項目であると実感されたので、特に念入りに指導、反復練習を行った。図7 a-c. は、資料1の冒頭部分の1文の強勢の曲線を図示したものである。図7a.のネイティブスピーカーの発音を基準にすると、図7b.の示す、受講者の開始直前(表示は受講者Fによる)のものは、短いポーズが繰り返される。これは、単語と単語の連なりがほぼ無視されて、訥々と単語が読まれていたり、読み方に自信のない単語の前で言いよどむなどのためである。これに対し、図7c.は、強勢が0に近づくことなく、単語ごとの連なりが実現され、完全ではないものの、ネイティブスピーカーの曲線(図7a.)のものに近づいてきているのがわかる。図7b.と図7c.の間には約4ヶ月の時間の経過があるが、その期間で、特に英語アクセントやその繰り返しによるリズムの実現が格段に向上したことがわかる。

リメディアル英語未受講者の発音の強勢曲線を、図8

a.(ネイティブ発音を聞く前) 図8b.(ネイティブ発音を聞いた後)に示す。

図8a.と図8b.の対照において全体的な強勢の形にさほどの変化はみられない。また、図8b.では、強勢が0付近まで下がっており、図7c.のものと比較すると、単語同士の連なりがあまり意識されていなかったことがわかる。以上により、リメディアル英語で実践したような、体系的な音声学の知識の養成と、反復練習とともにフィードバックを伴った適切な音声指導がなければ、一度ネイティブ発音を聞いた程度では発音の矯正は困難であるということがわかった。

7.まとめと今後の展望

以上、英語初学者への発音指導のあり方について、調

表4．受講者の文節音ごとの練習前後の成績(平均値、単位:%)

	子音						母音						
	/f/	/v/	/θ/	/ð/	/ɹ/	/l/	/sɪ/	/zɪ/	/æ/	/ɔ:/	/ɑ:/	/oʊ/	/eɪ/
練習前	25.0	66.7	16.7	50.0	50.0	83.3	75.0	50.0	16.7	91.7	16.7	33.3	83.3
練習後	50.0	66.7	100.0	83.3	100.0	100.0	83.3	100.0	50.0	100.0	41.7	50.0	100.0

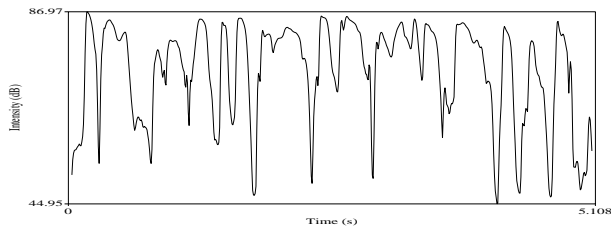


図8a. 未受講者Hによる発音(ネイティブ発音を聞く前)

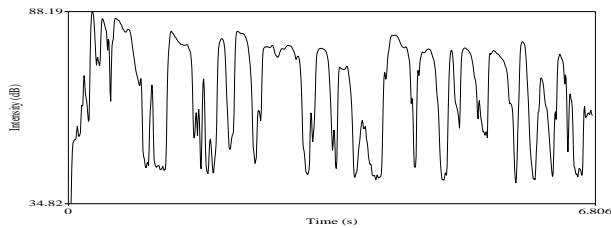


図8b. 未受講者Hによる発音(ネイティブ発音を聞いた後)

音声学の入門書(桑本 2017)とリーディングテキスト(MacMillan Readers,)を用いた授業の実践と、それに基づいた、大学における英語初学者に向けた適切な指導法を示した。英語学習者、特に基礎的な知識が十分についていない初歩段階の学習者にとっては、英語発話を円滑に行うのは非常に困難であるが、本実践を通して、知識の教授と、反復練習を伴った音読指導の両方を行うことによって、ある程度までの発音養成を達成することができた。

しかしながら、/f/ などの子音と、/ə:/ や二重母音 /oo/ などの母音の認識など、桑本(2017)を使った講義と音声発音の実践によって、強調して教授した内容が、MacMillan Readers の反復練習によってほとんど達成されなかったことなど、現段階では、今後克服しなければならない課題は多い。筆者は今後もリメディアル英語においてこの方法で発音指導を行っていく予定であるが、将来にむけて多くの細かな修正を行って取り組んでいかなければならない。さらに、本実践を幅広く大学教育の場に普及させるためには、受講人数の問題、教授内容やリーディングテキストのレベル設定などを受講者に則したものにすする基準の設定など、様々な問題を解決していかなければならない。これらも今後へ向けての課題である。

付記

本稿は、2017年度第31回日本音声学全国大会公開ワークショップ「英語教員を目指す人への英語指導法」(企画:山根典子)における口頭発表、ならびに2016~2019年度に公立鳥取環境大学で行った教員免許更新講習「英語授業における発音を見直そう!」(各年度8月

実施、2016年度のみ講習名は別名)で紹介した実践をまとめたもので、関西音韻論研究会2019年2月例会で行った口頭発表の内容に加筆修正を施したものである。

注

- 1) 受講者6名、未受講者3名の研究参加者計9名からは、口頭発表や論文執筆のために音声データを利用することの承諾を得ている(ただし匿名での利用であることは確認済み)
- 2) 海外留学、研修の経験の有無を調査したところ、受講者Cのみ高校時代に1週間程度の海外研修の経験があったが、他の研究参加者は海外留学、研究は未経験で、全体としては研究参加者の英語力に影響は及ぼしていないと考えられる。
- 3) 桑本(2017)では、接近音 /ɹ/ は /r/ と表記している。
- 4) [ɹ] はスコットランド英語などに存在し、また、アメリカ英語などで、shut up [ʃʌɾʌp] など、flapping として [ɾ] が発音されるが、導入時期の発音教育にはこれらの知識は必要ないとする。
- 5) 二重母音を8種としたのは桑本(2017:117)による。
- 6) 三重母音2種の分類は桑本(2017:120f.)に従う。
- 7) 具体的には、サンプルのネイティブ発音の音源をファイルにして配り、短い時間で構わないから毎日継続するように促した。
- 8) 新規の資料は、 の別箇所から抜粋したものを使用した。

参考文献

- 別宮貞徳(1977)『日本語のリズム』東京:講談社.
- Derwing, Tracey M. and Murray J. Munro(2015) *Second Language Acquisition: The Role of Phonology*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Fry, Dennis Butler(1955) "Duration and intensity as physical correlates of linguistic stress," *Linguistics*, 13, 765-768.
- Jenkins, Jennifer(2000) *Phonics for Foreign Language Learners*. Oxford: Oxford University Press.
- Jenkins Jennifer(2007) *Phonics for Foreign Language Learners*. Oxford: Oxford University Press.
- 川越いつえ(2007)『【新装版】英語の音声を科学する』東京:大修館書店.
- 桑本裕二(2012)「小学校英語活動に求められる日本人教師に対する英語発音の指導」『小学校英語活動支

援のための大学リソース活用モデル構築 平成22年度～平成24年度科学研究費補助金 基盤研究(B) 課題番号22320100 平成23年度分研究成果報告書』
11-22 .

桑本裕二(2017)『【改訂版】小学校英語発音のフシギ from いんぐりっしゅ to English』秋田市：秋田魁新報社 .

MacMillan Readers, MacMillan Readers Catalogue 2018-2019 (http://www.mlh.co.jp/img2/Readers_2019